

〔倭訓栞中編十五〕てんき 平生の口語にいふは、天氣にて字の如し。

〔倭訓栞前編十七〕てけ 土佐日記に見ゆ、天氣の急語なり。

〔土左日記〕九日正月、中略夜更てにしひんがしも見えずして、てけのこと、楳取の心にまかせつ、

略○中廿六日略ていけのことにつけて祈る、

〔倭訓栞前編二十五〕ひより 霽をいふ、日依の義、日方といふが如し、諺に天一太郎といふは、天一

天上の朔日、八專次郎は八專の二日め、土用三郎は土用の三日め、寒四郎は寒に入四日め也、此日雨ふり出せば、天氣あし、といへり、

〔物類稱呼五言語〕雨降らんとして日和になりたるを、畿内近國にても、日なをるといふ、東國にて俄

ひよりと云、日和の定らぬを、尾張にて一兩日和と云、筑紫にて一石日和と云、今按に、尾州にて

鈍々したる日和と云を、金子の貳歩々々にとりなして一兩の天氣と云、又一こく日和といふは、雨ふらんや、ふるまいやといふを、筑紫にて降うごと、ふるまいごと、と云、

〔常山紀談九〕同時原役小田 九鬼大隅守嘉隆、日本丸といふ大船を乗廻し、南の海上を取巻けり、此所

はあら海にて、東風吹時は、波浪山嶽を倒しかくるが如し、船をかけ並る事、思ひもよらぬ所なるに、秀吉城をかこまれし間、五十餘日風靜に波隱かなり、是よりして小田原海邊風なき日を上ウエサ標

日和ヒヨリといひならはしけり、

〔秋里隨筆上〕須摩龜井日和

敦盛の古墳を拜しありけるうち、早卒として天のけしき損、暴風雨をまじへ、且且々々まづかならず、聊茶店の軒に舍をもとめ、とても此けしきにては、ゆくこと能ふまじと、蓑の紐ときけるに、亭主

の曰、旅客はおどろき玉ふことなかれ、これは龜井日和なりといふ、略○中亭主答へて物語りけるに、家目井何某と申けるは、先祖九郎よしつね公に隨ひ、平家を誅せし、龜井六郎重治が末なる